

紀要論文

“ *LIFE AND HABIT* ” その狙いと功績

堀内 俊

東海大学福岡短期大学

The Aim and Achievement of

“ *LIFE AND HABIT* ”

by

Takashi HORIUCHI

ABSTRACT

Samuel Butler continued to write *Life and Habit* (1878), *Evolution, Old and New* (1879) and *Unconscious Memory* (1880) without a break after completing his first novel *Erewhon*.

It is said that these three evolution-related books were written in comparison with Charles Darwin's *On the Origin of Species by Means of Natural Selection* (1859).

After reading Charles Darwin's book, Butler was deeply moved by Darwin's theory of evolution, and respected him deeply. However, he gradually began to have some doubts about the theory, and finally accomplished his own creative theory on evolution, which he called “ unconscious memory. ”

This paper deals first with how Samuel Butler wrote *Life and Habit*, and then how the ideas in the book influenced other famous philosophers and psychologists in the 20th century.

Key words: Samuel Butler, Life and Habit, evolution, unconscious memory

〔1〕

サミュエル・バトラ - (Samuel Butler, 1835 1902) は、 *Erewhon* (1872) を完成後、 *Life and Habit* (1878)、 *Evolution, Old and New* (1879)、 *Unconscious Memory* (1880) と進化論に関する書物を矢継ぎ早に書きあげていった。これらの三冊は常にダ - ウィン (Charles Darwin, 1809 1882) の進化論を意識しながら書かれたことがうかがわれる。

ダ - ウィンの進化論『種の起源』(*On the Origin of Species by Means of Natural Selection*) が出版されたのは 1859 年のことである。丁度その年はバトラ - が宗教的偏重の強い 19 世紀のイギリス人思想家たちに懐疑心と嫌悪感を抱きつつ、また家庭内では、偽善的と思えるほどの宗教的解釈に偏る父親の後を継いで牧師になることを断り、国外に脱出しようとしていた時だった。ニュ - ジ - ランドに着いて間もなく、ダ - ウィンの『種の起源』がバトラ - の手元に届けられた。バトラ - はその地でダ - ウィンの進化論を読んで大きな衝撃を受けた。そしてたちまちダ - ウィンに心酔していったようだ。その後も 1862 年には、ある友人に宛てた手紙の中で自分はさしあたりキリスト教を棄てたとまで書き送っている。¹⁾

然しながら、バトラ - は何度も繰り返し読んでいるうちに、果たしてこの自然選択だけで進化的変化のかくも大きな部分を説明しきれぬものか徐々に疑いを持ち始めた。そしてこの生命の進化を解明すべく、もっと別の新しい体系を創りあげるべく試みにとりかかった。その足がかりとなるものが『生命と習性』(*Life and Habit*) である。この小論では、その辺りの事情を考証しながら、バトラ - の創造的進化論の核心を明確化し、それが後世の思想家たちにどのように受け継がれていったか観ていくことを目的としたい。

〔2〕

ダ - ウィン以前の進化論の歴史を遡ってみる時、ライエル (C.Lyell, 1797 - 1875)、キュヴィエ (G.Cuvier, 1769 - 1832)、ラマルク (J.Lamarck, 1744 - 1829) のそれらが浮かびあがってくる。ライエルは 一様変化説 (Uniformitarianism) を主張して、当時ヨーロッパで一流の学者として知られていたキュヴィエの 天変地異説 (Catastrophism) に真向から対立していた。ノアの洪水によって、それまで生きていた生物が全部死滅し、そのあとで神はあらたにいま生きている生物を創造された。そういうことが過去に何回も繰り返され、そのたびごとに神はより新しい、より完成した生物をこの世に誕生させた。そして神によって創造された生物は、それ自身で変化することはないとする。すなわち自然現象の説明を、オ - ソドックスな教義からはずれない立場で説明をしていたのが 天変地異説 である。

これに対してライエルの 一様変化説 は、彼独自の研究に基づいていて、神の創造ということを考慮しなくても、地球の変化は長い間の事実の積み重ねによってわかるとしている。過去に起こったものは現在にもひきつがれていて地球に変化はないのだ、だから進歩や進化はあり得ないという立場をとっていた。

しかし、この二つの説に共通して言えることは、双方とも 種は変わらず の考えに立脚していたことである。 種は変わらず に対して 種は変わる をはじめて公にしたのがラマルクである。ラマルクは無機質から生命の自然発生を信じ、原始生命に内在する可能性により進化が生ずることを説いた。²⁾ダ - ウィンの 自然淘汰説 は結果的にはラマルクと同じ 種は変わる に至った。バトラ - は『種の起源』を読み返しているうちに、ダ - ウィンは自説の中に逃げ道をつくっていることや、また必要に応じてラマルク説をとり入れていることを指摘し批判の対象とした。また、ダ - ウィンによる遺伝された習性としての本能の概念は、その昔に論破されたラマルク流の

もので、誤りとされていることを知った。³⁾これらの発見によって、バトラ - は自らの新しい進化論を構築してゆくうえでの自信を得たようである。

バトラ - がキリスト教を斥け、そのはずみでダ - ウィンを奉ずるにいたった経緯はよく知られている。しかし、実はバトラ - の存在の根源と基盤は宗教にあったようだ。バトラ - のダ - ウィンに対する熱狂ぶりは、最初クライスト・チャ - チ（ニュ - ジ - ランド）の「プレス」紙（1862年12月20日号）への匿名での寄稿から始まった。それは「ダ - ウィンの種の起源論」と題した哲学的対話の形をとっていた。内容は著者の熱烈なダ - ウィン擁護と、『種の起源』の主要テ - マである多産性、競争、自然選択についての明快な解説の他には、この文章に見るべきものはないようだ。これに対し、対話中の仮定の敵対者は時おり「忌まわしい」、「悪魔的だ」、あるいは「キリスト教を覆すものだ」とつぶやくのみであった。

ただ、自らの代弁者の口を借りて、バトラ - の真意が述べられているのは次の部分だけである。「私はキリスト教を信じているし、かつまたダ - ウィンを信じている。．．．．．これらは二つとも真実である。．．．．．これらを調和させることの不可能性は、見かけだけのまた一時的なものに相違ない。」⁴⁾この言明をどう解すべきかは、確信しがたいところである。前作の『良好なる港』(*Fair Heaven*, 1873) から、わずかな間にバトラ - はこうした意味合いをこめるまでに円熟したのだろうか。

しかし、バトラ - は後にはダ - ウィンも斥けたのである。これはとりもなおさず、彼が使徒信教と教会から離反したものの、科学に対して、というよりは科学の思いあがりやに反対して、宗教の側についたことを明らかにしたのであろう。ダ - ウィニズムに対する彼の根強い反論は、主教などがそれを表明する場合と自ずと異なる表現をとることとなった。彼は奇妙な神を崇めはしたが、ダ - ウィンは世界から神を追放して

しまったと抗議することによって、バトラ - は間違っても彼を盟友とは認めなかったであろう人々の傍に身を置くことになった。これに対し「プレス」紙（1863年1月17日号）の紙上に軽蔑的な記事が掲載された。バトラ - はこれをウェリントンのエイブラハム主教の筆になるものとみて、強い語調の手紙（2月21日号）⁵⁾の形でこれに回答した。しかし、見方を変えれば、この主教の軽蔑的な言葉がバトラ - の心中に芥子種を蒔いたことにもなる。

〔3〕

爾来、バトラ - はこの二つの大問題、すなわち宗教と進化の問題に取り組むことになった。上述のようにバトラ - は宗教を欲したが、使徒信教は欲しなかった。進化を欲したがダ - ウィンを欲しなかった。そしてバトラ - は次の二つの論文に取りかかった。一つは『機械にかこまれたダ - ウィン』（*Darwin among the Machines*, 1863）, 他は『酔余の夜なべ』（*Lucubratio Ebria*, 1865）である。

これらの中で彼はすでに、やがて彼の思想の中心を占めることになる問題、すなわち機械装置と生命体との対照に取り組んでいる。彼の精神は次のような問いを追求していた。機械とはそもそも何か、生きていることとは何を意味するのか。生きていることとは、ことによると極度に複雑化した機械たることを意味するのか。もしそうだとすると、どのような意味において機械は生きていないといえるのか。進化についてのダ - ウィンの説明は、完全に精神および目的性の概念を除去していたので彼の図式においては、生きた有機体も機械と区別し得ぬものとなる。そして機械を生あるものとみ、生存競争における人間の競争相手と見立てたらどうなるかを、試みにやってみたのである。

機械は人間よりもはるかに急速に進化しつつあるので、やがて人間をしのいでその

上位に立つだろう。人間は不可避免的に機械の奴隷となろう。従ってバトラーはこう勸めている。ただちに機械に対して撲滅戦が布告されねばならない。ありとあらゆる機械は人間という種の幸福を願うものの手で破壊されるべきだと。こうしたバトラーの思想は『エレホン』(*Erewhon*, 1872) 中の第 23,24 章「機械の書」として現れたが、この「機械の書」は今から約 130 年ほど前にエレホン人たちに、彼らの機械をことごとく破壊する気を起こさせた著作ということになる。

しかし、バトラーはそれまでの考え方、つまり機械を動物として扱うことについては早期のうちに見切りをつけなければならないと考えたらしく、それに変えて機械はわれわれが作りだした手足である。われわれとは合体せずに体の外部に携えている手足であるという見解をとることにした。⁶⁾次に彼は逆説的な試みを企てた。つまり機械は生あるものとして扱われたのだから、残るは手足を機械とみなすことであった。一定の目的に添うようわれわれが作りあげた事物とみなすことであった。そして脚とは人間がこしらえた義足よりもずっと精巧な義足にほかならないと考えるようになった。⁷⁾この辺りから彼の理論は、単なる観念的な遊戯ではなく、真面目なものに変容していくことになる。その結果として出来あがったのが、進化についての本格的な著書 *Life and Habit* である。

最初彼はこう自問した。もしわれわれが自らこうした上等な義足を作り出したとすると、どのようにしてそれを作ったのか。それが意識的になされたものでないのは明らかだった。とすると、どのようにしてなのか。無意識的にか。しかし、どのようにしてわれわれは無意識的にものごとをなしうるのか。それは習性によってである。われわれは、読書、ピアノ演奏、サイクリングといった諸習慣を、当初は意識的努力によって獲得するのだが、ある技術をより完全に身につけてしまえば、それだけ一層無意識的にそれに伴う諸行為を行うようになる。とりわけわれわれが最も完璧に行う行

為、消化、呼吸、血液の循環などは、それについてわれわれが最も意識することのないものである。とすると、どのようにしてわれわれは、決して意識的に行ったためしのないこうした無意識的諸習性を獲得したのか。それは、われわれの先祖において、つまりわれわれの過去の自己においてである。となると、われわれは、こうした過去の自己と区別しがたいものであるのか。われわれは、ある意味でそれら過去の自己と同一であるのか。そもそも「同じであること」ないしは「同一性」とは何なのか。私は昨日の自分と、今年の、50年前の、赤子のときの自分と「同じ」個体であるのか。私の物質的組織の一片たりともその間同一のままだったわけではないのだが、常識的には「然り」という答えになる。しかし、個体の同一性についてこうした常識的見解をとる以上は、赤子を越えてさらに胎児、生殖細胞、両親というふうに、どこまでもさかのぼらなければならなくなる。「誕生ということに、あまりに過大な意味が与えられてきたきらいがある。」⁸⁾と彼はいう。

また、こうもいっている。めん鳥はある卵がもう一つの卵を作るための方途にすぎないということは、しばしば言われてきたところである。われわれは、自分たちの過去の存在を憶えている。もっとも、あまりにもよく憶えているため、それについて内省することはできない。この無意識の記憶が遺伝の手がかりなのだ。どの子孫も両親に似るが、それは子孫が自らが最も最近にやっていたことを最もよく憶えているためだ。本能とは遺伝された記憶なのだ。数知れぬ過去の幾世代ものうちで繰り返しなされた諸行為についての記憶なのだ。⁹⁾これがいわゆるバトラ - の 無意識の記憶説と呼ばれる創造的進化論の核心をなす理論である。次章ではこの進化論に関するバトラ - の思想がどのように後世の思想家たちに影響を与えたかについてみていくことにしよう。

〔 4 〕

現在において創造的進化論の先駆をなす人物として知られているのは、フランスの哲学者ベルグソン(Henri Bergson, 1859 ~ 1941) である。彼は 1907 年『創造的進化論』(*L'Evolution Creative*) を発表して、生命は不断の創造的活動として持続するものであり、つねにできつつある過程であるから、できあがった世界を仮定している機械論や目的論も、ともに生命の本質をとらえていない。生命は物質的結合の機械的複雑化によって進化するのでなく、生命の唯一の根源的衝動によって、内から予見不可能な創造的進化をとげる。このような生命の緊張が弛緩する時生命は固定して物質化する、¹⁰⁾ という見解をとった。彼は生の創造的進化を説いて哲学のみならず文学、芸術の分野にまで大きな反響をよんだ。

また、彼は意識状態の有機的組織が量的測定をゆるさぬ絶対的、質的多様であり、空間的に固定され得ぬ純粹持続の不可予見的流動であることを説いて、ここにのみ決定論から解放された自由の世界があることを主張した。¹¹⁾ 他方、生物の進化は植物的麻痺状態と動物的本能との二大方向に分岐し、知性的人間は後者の頂点に位するが、知性はもともと物質への適応として生じたものである。それは個体的物質を加工する能力であり、事物を不可避的に固定化し、空間化するものであるから、流動する生命そのものを直観し共感することはできない。これに反して本能は、元来生命の共感であるから、自己を意識するにいたれば、直観にまで自己をたかめるものである。であるから生命の絶対的、創造的活動は、知性を越えて直観されねばならぬ。しかし本能は局限された対象に釘づけされたものであり、その対象を反省して無限にこれを拡大するためには、解放された知性が自己自身の内部にたちかえり、ねむれる直観をよびさますのでなくてはならない、¹²⁾ と説くにいたった。

このベルグソンにほぼ時期を同じくして、同様な思想を公表しているのがボラヴィ

ア(チェコスロバキア)生まれで、ウィーンで全成熟期を過ごしたフロイト(Sigmund Freud,1856~1939)である。厳密にいうと、ベルグソンよりフロイトの方がやや早くこの無意識の問題に取り組んでいたことになる。

フロイトの無意識の発見とその探求を特色づけていたものは、科学的知識への情熱と芸術的創造への情熱に引き裂かれた二元性であり、この葛藤がフロイトを19世紀的な機械論実証主義を乗り越えて新しい人間理解の地平をひらく20世紀思想の開拓者にした。フロイトは1885年フランスに留学し、病院で研鑽を積んでいるうちに、ヒステリ-現象を観察し、催眠暗示によって麻痺、痙攣がおこることを知った。その後移住先のウィーンとフランスを往復しながら、特に催眠暗示の現象に関心をもち、それによって、人間意識に現れない心的過程のあることに気づいた。¹³⁾

また、これより前1880-82年にブロア-(Josef Breuer,1842-1925)との共同研究により、ヒステリ-の症候を観察し、忘れていた過去の事件を催眠術によって思いださせ、カタルシスとフロイトが後に呼んだものによって治療の方法を発表した。このようにして、徐々にフロイトの深層心理学としての精神分析がつくられていき、その探求の中で心の無意識の活動に関する理論が確立されていった。

このようにフロイトの思想はフロイト学派として、多くの協働者や後継者をもつにいたったことはよく知られているが、ここではフロイト学派の中でも後に仲間と袂を分かって独自の道を切り開いた人物、スイス人のユング(Carl G. Jung,1875-1961)の理論を跡づけながら、さらにこの無意識の深層について掘り下げてみたい。

ユングは夢の解釈のごとき点においても、フロイトの過去の体験からの解釈を不十分として、前向きの解釈を提唱した。これは神話、その他の場合でも同様であって、

ゼウスの頭から生まれたミネルヴァの神話は、フロイトにとっては性的なるものの頭部への転移であるが、ユングは知恵の神的起源を示そうとする象徴として解釈した。また、彼はわれわれの心の深層には個人の体験に依存するのみではなく、原始よりの種族的な経験の集積に起源をもつ古態的な集団的無意識があり、遺伝的に伝達されるものと信じ、それを「集団的無意識説」と称し公表した。¹⁴⁾そしてこの説は、象徴の理論と共に現在でも多くの人々に認められている。

ユングの理論は、フロイトの影響を受けて生まれたものと考えられているのが今日的な常識である。そしてその見解に誤りはなかろう。然しながらこのように観てくる時、とりわけユングの無意識論の中には、前章で観たバトラ - の「無意識の記憶説」の中で既に述べられているアイデアが点在していることがわかる。

〔5〕

人間の生や心理に関する無意識論の系譜をたどってみる時、20世紀の中頃に確立されたベルグソン、フロイト、ユング等の理論が依然として現代の主流をなしている。しかし、今こうして精細に論考してみる時、バトラ - という無名の一英国人が彼等の思想を、とりわけユングが「集団的無意識説」として結実させた理論の粗雑な原形を先取りしていたのは瞭然たる事実のようである。19世紀の英国には、有名な作家や優れた詩人が大勢いた。バトラ - などという取るに足らない無名の作家の作品はもとより、彼の生や進化に関する理論に注目し、真剣に考察した読者など恐らくいなかったことであろう。

然しながら、バ - ナ - ド・ショウ (George B. Shaw, 1856 ~ 1950) がその戯曲『メトセラへ帰れ』(*Back to Methusela*, 1921) の序文の中で、バトラ - について次のような貴重な文章を書き残していることを見逃してはならない。

．．．．．ラマルクのいう、欲しかつ努力するという自覚的で知的な行為に比して、ダ・ウイン的進化過程は、いふなれば偶発事の連続である。そのようなものとして、それは一見単純なものにみえる。それというのも、最初はその含意するところを十分に悟ることがないためである。しかし、その意味するものを次第に感知するようになると、心は砂の塊と化して、重く沈み込む。それには、いまわしい宿命論がつきまどっているからである。おぞましくも呪わしいことに、そこには、美と知性とを、力と目的性とを、名誉と希求とを下落させ、それらをたまたま現出した絵画的変化 - 雪崩が山景に、あるいは鉄道事故が人間の姿に、生ぜしめるでもあろうような変化 - と化すものがあるからである。これを 自然選択 と呼ぶことは冒涇である。それは自然とは活動力も生命も持たぬ物質の偶然的集合体にすぎないと感じている多くの者にとっては可能かもしれぬが、義なる人々の靈魂にとっては永遠に不可能な冒涇である。．．．．．こうしたものの持つ働きは、あまねき残飯獲得闘争において生き残るだけの運に恵まれていない一切のものを、盲目的に餓死させ殺戮することによって、生きとし生けるものを変化させることだ、ということになる。．．．．．19世紀の最後の四半世紀にあってラマルクを信奉すること そのことがどのような意味あいをもつものだったかを知りたいと思う人は誰にしる、フェスティング・ジョウンス氏のサミュエル・バトラー追想録¹⁵⁾を一読すれば足りる。一方でダ・ウインに敵対し、他方教会にも敵対することによって、バトラーほどの天才ですらいかに完全に孤立するのやむなきに至ったかを知ることができよう。

19世紀の英国は、特にヴィクトリア朝を頂点として、大変な社会的かつ経済的發展を遂げた時代である。国家や産業の發展だけでなく、芸術や文化の面でも外に向かって大いなる發展をとげた。文学でも自己の内面に沈み込むような暗いものは少なく、

現実に即して外部の発展を歓迎とするような小説や、逆に現実をはなれて恍惚的に美を追求していくといったいわゆる耽美的な詩や小説が多く出版された。そしてバトラ - の作品もその域を越えるものではなかった。しかし、彼の業績全般を振り返って観る時、文学者としてよりも、一人の思想家として捉えるほうがその価値は高まるのかもしれない。

〔注〕

1) Henry F. Jones: *Samuel Butler, A Memoir*, Octagon Books INC. 1968, pp.97 ~

98

ここでは、1862年8月14日付の大学時代の友人マリOTT(Marriott)宛ての手紙を指す。“ For the present I renounce Christianity altogether. You (Marriott) say people must have something to believe in. ” といった形で書かれている。

2) 八杉竜一『進化論の歴史』岩波新書,1969, pp.87 ~ 112

この章ではラマルクとキュヴィエの対立の様子が詳細に述べられている。

3) Lee E. H. Holt : *Samuel Butler* , Twayne Publishers, 1964, pp.125 ~ 6

4) *The Works of Samuel Butler*, Edited by Henry F. Jones, Shrewsbury Edition,

1923 ~ 6, Vol.1, pp.193 ~ 4, 尚、1968年にはNew YorkのAMS Pressから、

これの復刻版が出されている。以下これを『全集』と略記する。

5) 上掲の『全集』Vol.1,p.198

6) 上掲の『全集』Vol.6, p.17

7) 上掲の『全集』Vol.2, p.202

8) 上掲の『全集』Vol.4, p.49

9) 上掲の『全集』Vol.4, p.11

10) Henri Bergson: *L' Evolution Creatrice*, 1907, (真方敬道訳)『創造的進化論』

紀要論文

岩波文庫、上巻、1954、第一章「生命の進化 - 機械性と目的性」参照

- 11) Henri Bergson: *Essai sur les Donnees Immediates de la Conscience*, 1889 (平井啓之訳) 『時間と自由』白水社、1990、第三章「意識の諸状態の有機化について - 物理的決定論、心理的決定論」参照
- 12) 上掲の『創造的進化論』上巻、第二章、「生命進化の発散方向・麻痺、悟性、本能」参照
- 13) この辺りのフロイトに関する理論は *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of S. Freud* 24 Vols、1953～64、(『フロイト著作集』全7巻、人文書院、1968) 参照
- 14) Carl G. Jung and Joseph L. Henderson, Jolande Jacobi, Aniela Jaffe: *Man and His Symbols*, Adus Books Limited, London, 1964 (河合隼雄監訳) 『人間と象徴』 - 無意識の世界 - 、河出書房新社、第一章「タイプの問題」pp.81～96 及び「夢象徴における元型」pp.97～123 参照。ここにはユングによる夢の分析方法が詳細に述べられている。
- 15) 上掲の Henry F. Jones: *Samuel Butler, A Memoir*, Vol.1, 2 を指す。

参考文献

- 1) 八杉竜一著 『ダ - ウィンの生涯』岩波新書、1950
- 2) チャールズ・ダ - ウィン著 (八杉竜一訳) 『種の起原』岩波文庫、1963
- 3) J. D. バナ - ル著 (山口清三郎、鎮山泰夫訳) 『生命の起原』岩波新書、1952
- 4) ジル・ウィリー著 (松本 啓訳) 『ダ - ウィンとバトラ - 』みすず書房、1979
- 5) J. P. ブラウン著 (松村昌家訳) 『19 世紀イギリスの小説と社会事情』英宝社 1987
- 6) Samuel Butler: *Unconscious Memory with an Introduction by Professor Hartog*, Jonathan Cape, London, 1880

- 7) *Samuel Butler Essays on Life Art and Science*, Edited by R. A. Streatfeild, Grant Richards, London, 1904
- 8) Petronella Jacoba: *Samuel Butler, Critic and Philosopher*, W. J. Thieme & Cie Zutphen, 1925
- 9) *Samuel Butler's Notebooks*, Selections Edited by Geoffrey Keynes and Brian Hill, Jonathan Cape, London, 1951
- 10) Philip Henderson: *Samuel Butler, The Incarnate Bachelor*, Cohen & West LTD, London, 1953